〈内国植民地〉としての北海道

― 有島武郎と小林多喜二 ―

尾西康充

一、有島武郎―社会主義とキリスト教

ハーバード大学大学院に聴講生として在籍していた有島武郎は一九〇五年一月一日、マサチューセッツ州ボストンで開かれた「社会主義者ノ集会」にアメリカ社会党(Socialist Party of America)党員の金子喜一とともに出席した。その日の日記には「酒売業」をテーマにした「広額強口ノ大漢」による講話を「同情ト興味トヲ以テ」聴き、そこに集まった「実ニ種々雑多ナル人」の「面貌ヲ熟視シテ快ニタエザリキ」とある。彼らのなかには「或者ハ小児ノ如キ純潔ノ相」を持つ一方、「幾多ノ明確ナル criminal type 」が混じっていることを見出し、「余ヲシテ痛切ノ思ヲナサシメ」たという。前年の夏には、ハヴァフォード大学を卒業してハーバード大学大学院に入学するまでの短い期間、フレンド精神病院(Friends' Asylum for the Insane)で看護師として奉仕労働をおこない、臨床例を多数記載した医学専門書を読みふけっていたために、人相から性格類型を判断する習癖がついていたのだと思われる。この日の午後には、金子が持参した「平民新聞」を読んで「日本政府ガ社会主義者ヲ窮迫スルノ状甚シ」いことに「益無責任不公平ナル政府ノ危険」を感じていた。政治意識の高いボストンで「社会主義者ノ集会」に出席することによって、労働者階級とエスニック・マイノリティーが連帯する前衛的な社会運動を体験したのであった。

金子が入党していたＳＰＡは、社会主義を標榜する政党勢力の結集をねらった社会民主党(Social Democratic Party)が一九〇一年に社会主義労働党(Socialist Labor Party)と合同してできた。金子はＳＰＡ機関紙「理性への訴え」(Appeal to Reason)の記者ジョセフィン・コンガー(Josephine Conger)と結婚し、このときすでにアメリカ国籍を取得していた。ＳＤＰはユダヤ・フィンランド・ドイツ移民や炭鉱労働者、労働組合員、中西部の前・人民党の農民、知識人たちからの支持を受け、一八九八年のマサチューセッツ州議会議員選挙では二名を当選させ、一九〇〇年の大統領候補者選挙ではユージン・デブス(Eugene V. Debs)候補に八七，〇〇〇票が集まった。このようなＳＤＰの勢いを借りてＳＰＡは急進的社会主義者から社会民主主義者までの幅広い層を結集し、一九一九年にアメリカ共産主義労働党(Communist Labor Party)が結成されて分裂するまでの間、労働者とエスニック・マイノリティーが連帯して闘争する政党に成長していた。

「社会主義者ノ集会」に出席した同じ日の朝、有島は森本厚吉への書簡に「余ガ非国家的思想ハ愈々根底ヲ堅クシ来ルガ如シ」と伝え、

さらに一九日にも「三度非戦論」を唱えて「余ハ如何ニシテモ可戦論ノ理由ヲ見出スニ苦シム」と記していた。内村鑑三や幸徳秋水たち一部の言論人を除いて戦争賛美の世論に支配されていた日本社会に違和感を持っていた。有島にとって、〈他者〉を受け入れるようとするキリスト教の〈隣人愛〉と、国民としての忠誠を優先させて〈他者〉を排除する〈愛国心〉とは対立するものとされ、「根本的ニ基督教ト矛盾セル国家ヲ除去セヨ。全地球ノ住民ヲシテ一体タラシメヨ」と考えられていた。だがその一方で、日本人に対して民族的な差別の眼差しを向けながら同時に、大国ロシアへの敵愾心によって日露戦争を煽りたてるというアメリカ社会の大衆に落胆させられ、キリスト教と国家との相克は「心中ニ徂徠セル彼ノ激烈ナル観念キビシク心ヲ補ヘ容易ニ眠リニ就クコト不能」であるとされるほどであった（日記一九〇五年一月八日）。

有島が煩悶していたちょうどそのとき、元札幌農学校校長である新渡戸稲造の論文「日本帝国の膨張」が掲載された総合雑誌「太陽」第一〇巻一六号（一九〇四年一二月）が船便で日本から送られてきた。非暴力・平和主義を信奉するクエーカー教徒(Friends)としての新渡戸を、札幌農学校在学時代から尊敬していた有島にとって、新渡戸が日露戦争をあたかも容認するような発言をしていたことに衝撃を受けた。

> 此夜家ヨリ「太陽」送リ来ル。新渡戸氏ノ文アリ。余ハ是ヲ読ミテ涙ヲオトセリ。札幌ニアリシ彼ノ面影ハ余ノ眼ニハ漸ク薄ラキ行クヲ覚フ。余ハ尚彼ノ principle ヲ疑フコトヲセジ。ソハ一人ノ信シタルモノヲ失フハ余ニ取リテハ無上ノ苦痛ナレバナリ。サレトモ余ノ胸ハ静カナルコト能ハズ。寒気ヲ犯シテ外出シ何処トモナクサマヨイ歩キヌ。人ハ遂ニ其ノ窮極ニ於テ孤立セザル可ラズ。神ノミニ己ガ心ヲ打明ク可キ時ハ来ラザル可ラズ。サレトモ世ノ多クノ人ハ是ヲナスノ信念ト勇気トナシ。余モ亦今ハ弱キ其一人ナリ。恥ザル可ンヤ。（日記一九〇五年一月五日）

新渡戸は一九〇一年から台湾総督府民政部殖産局長を務め、行政官として植民地支配に関与していた。「太陽」に発表した「日本帝国の膨張」は、帝国の版図拡大を直接主張したものではなかったが、「今日奉祝する今上陛下の御威徳」に従う「精力ある国家」として海外に「膨張」することを容認する内容であった。有島はこれを読んで「涙ヲオトセリ」とし、「札幌ニアリシ彼ノ面影」が「漸ク薄ラキ行ク」のを覚えたという。しかしそもそも新渡戸や有島が学んだ札幌農学校は、アイヌ民族が住んでいた原野を「内国植民地」(domestic colony)として開発する人材を養成するために設立された実業学校で、ウィリアム・スミス・クラーク(William Smith Clark)がもたらしたキリスト教を創設期の校風とし、キリスト教を通してアメリカの開拓者精神が導入されていた。内田魯庵は『社会百面相』（一九〇二年六月、博文館）のなかで、信者の間で「敬虔篤信」で知られていた「我は福音を恥とせざる」牧師が、月々増える借金と政界への進出という野望のために、政友会と北海道庁とがからんだ不正な土地払い下げに手を染める姿を描いた。カトリックのイエズス会をはじめ海外伝道に熱心なキリスト教会は、宣教活動によって他民族を啓蒙して未開地を文明化す

るという使命を抱いていたが、それは帝国の植民地政策と表裏一体のものであった。外国の伝道会社からの支援を受けずに自主独立を目指していた日本のプロテスタント教会は、キリスト教会に内在していた〈植民地主義〉を継承しながらナショナリズムと一体化して、内国植民地としての北海道や沖縄、海外植民地としての台湾や中国東北部における殖民政策に協力した。魯庵は北海道の不正な土地払い下げにからめて、開拓者が侵略者に急転する危険を持っていたことを示唆していたのである。

二、北海道の農地をめぐって

（一）畑作と軍需産業

北海道庁設立後の一八八六年に施行された「北海道土地払下規則」は、一定期間土地が無償で貸し付けられ、開墾が成功すると一、〇〇〇坪（約三、三〇五平方メートル）単位一円で払い下げられた。上限が一人当たり一〇万坪（約三三〇、五七八平方メートル）とされたが、「盛大ノ事業」のなかで確実なものには上限に例外が認められたために、大地主が生まれることになった。つぎに一八九七年の「北海道国有未開地処分法」は開墾が成功すると無償で付与され、上限が農耕地で一五〇万坪（約四、九五八、六七七平方メートル）、牧畜地で二五〇万坪（約八、二六四、四六二一平方メートル）、植林で二〇〇万坪（約六、六一四平方メートル）と一気に拡大された。この時期に約一七八万ヘクタールに上る土地処分がおこなわれ大規模な地主が族出したが、道庁職員が職権を乱用して土地を手に入れたり、投機目的で土地が転売されたりした。有島の父武は北海道の開拓事業に支配的な権力をもっていた薩摩藩出身の大蔵官僚であったので、「北海道国有未開地処分法」を利用して「胆振国マツカリベツ」（真狩村字真狩別太）に「地積九十六万余坪」の借地を獲得した。このような大地主（場主）のなかには、農場に管理人（帳場）をおいて経営を任せ自分は都市に居住するという寄生地主（不在地主）になるものたちがおり、大正初期には五〇町歩（約四九、五ヘクタール）以上の農地を所有する大地主は約一〇〇名存在したとされる。

開拓初期の北海道の農業は、官営工場による原料買い上げに関連して小麦や大麦、大豆、菜種、麻、藍、甜菜の作付けが奨励され、やがて商業的農業が本格化すると食用作物の生産に比重が移って麦類や豆類に加えて馬鈴薯などが中心となった。他方、日露戦争がはじまると陸軍によって馬とその飼料である燕麦、さらにテントや帆布の生地である亜麻が大量に買い上げられ、それ以後は北海道の農地は軍需産業の一翼を担うことになる。だがさらに注目されるのはハッカ（Japanese Mint）栽培で、ハッカを水蒸気で蒸留して精製した取卸油は一八七三年からロンドン市場に輸出された。北見市に建設された「北見薄荷工場」では操業五年目の一九三八年にして取卸油の生産が世界生産量の七〇パーセントを占めるに至った。さらにヨーロッパ大陸が戦禍によって荒廃して農作物不足をもたらした第一次世界大戦では、インゲンやエンドウなどの豆類、馬鈴薯澱粉がロンドン市場と直接結びつき、一時的ではあったが成金を輩出することになった。小林多喜二の「不在地主」（「中央公論」一九二九年一一月号、「戦旗」一九二九年一二月）によれば、「三年前に、青豌豆の値が天井知らずに飛び上がった」

とき「和蘭が不作のために、倫敦から大口の注文」が入ったからだといわれていたが、実際には「小樽の大問屋で、大貿易商であるカネ辰」が「高く売り飛ばすために買い集めてしまってから、そう宣伝した」ためだとする。この後も、北海道では豆類をめぐる投機熱は収まることがなかった。

他方、有島の「カインの末裔」(「新小説」一九一七年七月号)の仁右衛門は、場規を無視して畑の半分に亜麻を栽培したり、「播種時から事務所と契約して事務所から一手に陸軍糧秣廠に納める」はずの燕麦を「どんどん商人に渡して」しまったりと、勝手な行動ばかりする。しかし実は、軍需品を納める官営工場と陸軍糧秣廠によって買い上げられる農作物に、商人たちが群がって投機的な利ざやを得ていたのに、巧みにつけ込んでいたのである。このような仁右衛門は場規を無視して小作料も納めないだけではなく、小作料の軽減を求め立毛差押さえに反対する小作人たちと連帯しようともしない。一九〇七年二月、ロンドンに亡命していたピョートル・クロポトキン(Pjotr Aljeksjejevich Kropotkin)に面会した有島は、都市と農村が有機的に統一された自治的な協同社会を実現しようとする〈無政府主義的共産主義〉に共感したが、この作品の創作においては、仁右衛門のような「自然人」が持つ「本能」から奔出するエネルギーによって社会秩序を打破することが試みられた。襤褸を身にまとい、草履や草鞋を常用していたために当時市街地の人たちから「原野もの」と呼ばれて軽蔑されていた小作人の内部に、共同体を解体する原始的なエネルギーを見出したのである。だが「どれほど残虐な事でもやり兼ねない」仁右衛門は「大きな愚かな子供」でしかないために、「三年経つた後には彼れは農場一の大小作」になり、「五年の後には小さいながら一箇の独立した農民」となって、「十年目にはかなり広い農場を譲り受けて」いることを想像するばかりで、帳場に交渉するために連帯している小作人たちに協力しようとしない。そして農場での自分の立場が悪くなると、函館にいる場主のもとに彼ひとりで交渉に出かけるが、「小作料の一文も納めないで、どの面下げて来臭つた。来年からは魂を入れかへろ。而して辞儀の一つもする事を覚へてから出直すなら出直して来い。馬鹿」と怒鳴られ、「すつかり打摧かれて自分の小さな小屋に帰つた」のである。

出自がイングランドでアイルランドに土地を持つアングロ・アイリッシュ(Anglo-Irishman)の地主制を分析したテリー・イーグルトンによれば、場主の「宏大な邸宅」は「物質的富裕さが精神の媒介物として正当化」され「そのなかで活動する者の身体」と化している。場主にとって大邸宅は「外在的な所有物ではないので、肉体そのものと同じように譲渡しがたい」もので、「肉体と同じように〈自然〉の顕在化する場」として、あるいは「〈自然〉と〈文化〉の間に位置する両価的な領域」にある「歴史的に仕立てあげられた〈自然〉」としての意味を持つようになるという。[1] これを手がかりにすれば、仁右衛門のような「自然人」の持つ「本能」も〈自然〉となった大邸宅の前では、〈自然〉の力関係に屈服せざるを得なかったことが分かる。

(二) 造田熱—土功組合と朝鮮人工夫

ところで仁右衛門が働く蝦夷富士(羊蹄山)山麓にあるK村の松川農場は、麦類や馬鈴薯などの畑作が中心であったが、小林多喜二が「不

在地主」（「中央公論」一九二九年一一月）に描いたS村の岸野農場は稲作が中心であった。実際には空知郡下富良野（富良野市）にあった磯野農場がモデルとされ、多喜二は一九二七年三月の小作料減免をめぐる第二次磯野小作争議を取材して作品を執筆した。大正から昭和へと元号が変わる一九二六年の五月二四日には、十勝岳が大噴火を起こし死者行方不明者一四四名を出すと同時に、旭川に本店を持つ絲屋銀行が第一次世界大戦後の経済不況の影響を受けて整理休業した。小樽で倉庫業、海産物問屋、漁場の経営をおこなう磯野進が大野安吉から農場を譲り受けた一九一一年当時、田五五町歩畑一二〇町歩に三七戸の小作人がいた。他に町有地もあったが又小作に出されていた。十勝岳噴火による泥流の影響で河川が酸性化し、しかも冷害に見舞われたために不作におちいったにもかかわらず、磯野は「一俵半から二俵の収量なのに、最高三斗の小作料」を強要したために、小作争議が発生する事態となった。以前から「反当一円五十銭から三円位だつた小作料（いわゆる畑年貢）を、水田年貢に切替える」として「最高反当米一俵の穀納」にしようとし、一九二三年には「最高三俵～四俵半の生産力に対して、一等地、二等地、三等地の区別」をして「平均反当四斗の穀納」と定め、「開墾の進捗するに従い更に収穫の六割を耕作者、四割を地主にという小作契約に更新」しようとして「最高七斗六升の小作米納入」を要求した。管理人但木雄尾との折衝は難航して「富良野町最高の苛酷なる小作料として遂に小作側の憤激するところとなった」のである。[2] このように磯野が強気の姿勢を崩さなかったのは、磯野農場の「一戸分五町歩の小作株が、三百円から五百円」もしたように「水田造成面積の増加」による「米作の将来を見越し」ていたからである。[3]

そもそも寒冷地には稲作栽培が向かず、米の栄養価も低いことなど、稲作には消極的であった道庁は、一八九二年に農学者酒匂常明が道庁財務部長に就任して以来、水田試作場を設置して各種試験をおこなって品種改良を進めたり、水稲直播器を普及させて技術向上に努めたりして、積極的に稲作を奨励するようになった。しかし「富良野」の語源とされたアイヌ語の「フーラ、ヌイ」が「臭き火焔」、「フラヌ」が「臭き野原・腐れる野原」という意味であったように、[4] 美瑛川上流にある十勝岳から硫黄成分を含んだ火焔がしばしば上り、そこから流れる川の水は硫黄の臭気が強いために飲むにたえないとされた。とりわけ磯野農場があった北大沼は、かつて富良野湖であった名残から三六〇～四五〇センチの葦が生い茂り、ヤチダモやハンノキなどの原生林におおわれた湿原地帯であった。このような悪条件のために畑作の見込みが薄く、第一次世界大戦の豆景気とも無縁で、専ら稲作に地域の将来が賭けられた。

そこで一九一九年に富良野土功組合によって河川改修工事とともに中央排水路が設けられ、ようやく湿原地帯を乾燥させることができた。しかし泥炭が乾燥すると「最も燃焼しやすい状態」になり、その結果「よしを刈って火をつけて焼くと地下まで燃焼し、折角苦心してつけた道路の土が焼けてしまったり、地下を燃えつづけて来た火によって、住宅が火災になったりした」という。[5] さらに一九二三年に富良野用水土功組合が空知川から富良野平野まで二二、五一九メートルにおよぶ山手幹線を完成させて灌漑用水を確保したが、一九二六年の凶作による救済工事がおこなわれるまで漏水のために道路が水没することがあ

った。同じ下富良野にあった北海道帝国大学農学部の学田地に比べて、北大沼の磯野農場は土地条件が劣悪な場所であったといえる。小作人たちの苦労は並大抵のものではなく、「不在地主」のなかで、多喜二は「自分のものでもない泥炭地の田を、どうにか当り前にしようと、無理に、体を使った」「三吾」が「寝がえりも出来ない程の神経痛」にかかって「藁束のようにカサ〳〵に乾しからびて、動けなく」なったことや、「伊藤のおかみさん」が「北海道の冷い田に、あまり入り過ぎた」ので、「三月も腰を病んで、それからは腰が浮かんで、何時でも歩くときは、ひどい跛のように」なった姿を描いている。だが第一次世界大戦後の恐慌によって畑作農産物の相場が大暴落したことや、河川改修排水工事の進捗のもとで、磯野農場では急速に造田が進み、稲作面積は一九二一年には約七〇町歩、一九二二年には一六〇町歩になり、小作争議当時は自給野菜畑を除く既墾地のほとんどが水田になったとされる。(6)

三、監獄部屋と朝鮮人土工夫

稲作の進展に大きな役割を果たした土功組合は、一九〇二年に公布された「北海道土功組合法」にもとづいて道内各地で結成された。第一次世界大戦の終結後に投機的な畑作農業が打撃を受けた際に米価が暴騰したことや、人口増加による食糧不足に備えて政府が産米増産計画を立案したことなどによって、全道で造田の気運が高まった。本来、水田の造営には排水や灌漑などの多額の費用がかかるものだが、道庁や北海道拓殖銀行から融資を受けた土功組合が灌漑工事を「監獄部屋」に請け負わせることによって、「大地主」が「二重にも、三重にも」労働賃金をピンはねしていたことを、多喜二は暴露している。

村長を看板にし、関係大地主が役員になって、「土功組合」を組織し、北海道庁から「補助金」や「低利資金」の融通を受ける。拓殖銀行は特別低利で「年賦償還貸付」をした。北海道拓殖のためだった。—その工事は「監獄部屋」に引受けさせる。土方を使えば、当り前一日三、四円分位の労働を五、六十銭でやる。で、頭が二重にも、三重にもハネられた。

大地主は只のような金で、その金の割合の何十倍もの造田が出来た。造田さえされゝば、「低利資金」位は小作料だけで、ドシ〳〵消却出来た。

多喜二によれば、「大地主」は「二重にも、三重にも」労働賃金をピンはねし、「只のような金」で「何十倍もの造田」をしていた。そして「低利資金」は「小作料だけ」で簡単に返済できた。結局のところ「大地主」が巨利を得るために「小作人と土方」ばかりに重い負担がかけられていたという。「監獄部屋」の労働者たちは連日一五時間以上の重労働が続き、逃亡防止のために監視員が二四時間見張っていた。「不在地主」の主人公健が働いていた工事現場には「百人近く」の朝鮮人労働者が就労し、トロッコが土煙をたてながら転覆するという危険な場面を描いている。

「アッ！」誰か叫んだ。

トロッコが土煙をたてながら、顛覆した。裏返えしになったトロッコの四つの車輪だけが、惰勢でガラガラと廻った。―乗っていた土方は土の下になってしまった。然し、誰もそれにかまっていない。―日雇いに行っている健達は思わず立ち止って、息を殺した。

堅田精司氏によれば、一九一〇年代後半から一九二〇年代にかけて道内の土工夫の労働争議事例は二五件を数えるが、「労働条件が悪いにもかかわらず、工場労働者や運輸労働者の争議に比較して、数が少ない」という。一九二八年の道内の土工夫数二四、八三四人のうち朝鮮人工夫数は一、七五四人、全工夫の七パーセントにすぎない。しかし朝鮮人工夫によって起こされた争議は一三件に達している。それほど多くの争議を起こせたのは、「一九二七年秋に北海道支部創設委員」として在日本朝鮮労働総同盟から来道していた洪仁杓がすぐれたオルグで、一九二八年二月頃に旭川に移り、「朝鮮同胞の労働条件改善に奔走」していたからだという。(7) さらに一九三三年二月、札幌に日本労働組合全国協議会（全協）に日本土木建築労働組合札幌分会が非合法で結成された際、朝鮮人土工夫が主な活動分子となり、「一九三〇年代から四〇年代前半までの北海道における土木労働者の労働運動は、朝鮮人土工夫によって展開する」という。(8)

「この一篇は、『殖民地に於ける資本主義侵入史』の一頁である」というプロローグが付された「蟹工船」（「戦旗」一九二九年五・六月）のなかで多喜二は、北海道では労働者に対して資本家が「朝鮮や、台湾の殖民地と同じように、面白い程無茶な『虐使』が出来た」ことを告発している。たとえば「『国道開たく』『鉄道敷設』の土工部屋では、虱より無雑作に土方がタヽき殺さ」れ、「殊に朝鮮人は親方、棒頭からも、同じ仲間の土方（日本人の）からも、『踏んずける』ような待遇をうけていた」という。当時最も差別的な境遇におかれた監獄部屋の朝鮮人土工夫の視点に立脚することによって、国内外の植民地支配を通じて帝国の版図を拡大し続けた日本社会の総体を、根底からとらえ返したのである。津田孝氏によれば、多喜二の〝カムサツカ〟から帰った漁夫の手紙」（「改造」一九二九年七月）には「朝鮮人やアイヌは、丁度日本の労働者がアメリカで嫌われるのと同じように、嫌われています」や「たった風呂敷包一つ持った、薄汚い朝鮮人が北海道のどの汽車にも、必ず一人は乗っている、あれを憐れんだことがあった。今度こそ、それがそのまゝ自分だと思わされるのです」という表現があり、それらは多喜二が「自国の労働者にたいする『植民地的搾取』と同時に、被抑圧民族の問題にたいしても鋭い作家的観察をしていた」ことを示しているという。(9)

さらに「不在地主」のなかで、多喜二は朝鮮人土工夫への着目に加えて、農場主岸野の令嬢が小作人たちの生活を目撃する場面で、疎外された境遇におかれていた小作人たちの姿を描き出した。「クリーム色の洋装」をした令嬢は、「丁度同じ年位の娘」が水田に入って働いているのを見て「あれじゃ足も手も―身体も大変ね！」といい、「あたし学校の参考に稲を二、三本戴いて行きたいんですけれど……」と依頼する。しかし稲を差し出した小作人の女性たちの手を見て、「思わず手の甲で口を抑えた」とする。それはとても「手」とは思えないほど過酷な労働で傷んでいたからで、令嬢は都会で思い描いていた姿

とはまったくちがう小作人たちの現実を目の当たりにして「軽い頭痛」に襲われてしまう。

令嬢は、軽い頭痛を覚えていた。—汽車の窓から見たり、色々な小説を読んだりして、何か牧歌的な、うっとりするような甘い、美しさで想像していたチョコレート色の藁屋根の百姓家！ それが然しどうだろう。令嬢は二三軒小屋を覗いてみた。—真暗な家の中からは、馬糞や藁の腐った匂いがムッと来た。暗がりから、ワァーンと飛び上った金蠅の群が、いきなり令嬢の顔に豆粒の様に、打ッかった。令嬢は「アッ！」と声をたてた。腹だけが大きくふくれて、眼のギョロッとした子供が炉の中の灰を手づかみにして、口へ持って行っていた。上り端に喰いかけの茶碗と、塩鱒の残っている皿が置きッ放しになって居り、それに蠅が黒々と集っていた。隅ッこに、そのまゝに積み重ねてある夜具蒲団の上から、鶏がコクッ、コクッと四囲を見廻しながら下りて来た。……管理人のところへ帰ってから、濡らしたハンカチを額にあて、令嬢はしばらく横になった。

小作人たちが住む小屋を訪れてみると、令嬢は「馬糞や藁の腐った匂い」にむせ、「金蠅の群」に打ちかかられた。「腹だけが大きくふくれて、眼のギョロッとした子供が炉の中の灰を手づかみにして、口へ持って行っていた」。「喰いかけの茶碗」と「塩鱒の残っている皿」には蠅がたかり、「夜具蒲団」のうえから「鶏」が下りてきたという。令嬢にとって不潔極まりない小屋には、貧困に苦しむ小作人たちの現実があった。さらにその日の暮れ方、管理人の事務所に小作人たちが集まってくると、令嬢はつぎのような感想を抱く。

日が暮れかゝると、小作人がボツ〳〵集まってきた。土間にムシロを敷いて、高張りの提灯を幾つも立てゝいた。令嬢を見ると、小作人の人達は坐り直して、丁寧に挨拶した。教会に通っている令嬢には、「野にいる羊」のように純真に思われた。父が経営している小樽のS工場の傲慢な職工達とは似てもつかない、と思った。

彼女の姿を見ると「坐り直して、丁寧に挨拶した」小作人たちは、「教会に通っている」令嬢にとって、「野にいる羊」のように「純真に」思われた。そして「父が経営している小樽のS工場」の「傲慢な職工」とは「似てもつかない」と感じられたという。昼間に小屋を訪れたときには、不潔さに嫌悪感を抱いたのに対して、暮れ方に面会したときには、小作人たちの素朴な態度に「純真」さを感じとっている。このような令嬢の感情の変化は、たとえどれほど社会から疎外された者にでも神の栄光がもたらされるというクリスチャンのヒューマニズムにもとづいていたともいえるが、その一方で、人間の内面を教化することによって抵抗する主体を「野にいる羊」として馴致させるというキリスト教会に内在していた〈植民地主義〉の傾向を孕ませている。〈野蛮〉を無知蒙昧から救い出して〈文明化〉することに自己の使命を見出す〈啓蒙〉は、帝国による他者の支配を合理化させる行為に転じ得るものであり、キリスト教を棄教した有島が「カインの末裔」に狂暴な仁右衛門の姿を描き出したのは、そのような教化馴致を唾棄す

べきものと考えるようになっていたからであった。

四、〈開拓地〉から〈植民地〉へ
―〈本能〉の自覚と〈階級〉の自覚

北海道では実際、明治半ば頃まで小作人が不足しがちであったために、地主のなかには開墾料や小屋掛料、農具、食糧を貸与し、開墾して最初の六年は「鍬下年限」として小作料を徴収しなかったものがいたり、[10] 開墾地の半分は無償供与したりするものがいた。しかし「不在地主」によれば、いくら「開墾補助費」をもらっても、そこから「家族連れの移住費」を差し引くと「一年の開墾」しかできずに「低利資金」を借り、五、六年かかって畑から田へと整備したところで、「首ッたけの借金が百姓をギリ〳〵にしばりつけていた」。また「開墾した暁には、その土地の半分を無償でくれる約束で、小作人を入地させながら、いざとなると、その約束をごまかしたり、履行しなかった」という。その一方で村の生活水準が下がってゆくのに連れて「大地主の存在がジリ〳〵と圧迫していた。小作人より苦しんでいた」とする。〝内地〟に比べて決して恵まれている環境とはいえない農場を所有した農場主は、小作人に対して一層過酷な収奪をおこなうようになったのである。

帝国日本が流布させた北海道をめぐる言説は、開拓の希望によって彩られたものであったが、多喜二はそれらが欺瞞に満ちていることを小作人たちの小屋から、さらに朝鮮人土工夫の労働現場から、さらに「これより下がないというドンづまり」の「酌婦」のいる「曖昧屋」から一つひとつ反証をあげて抗議した。「不在地主」が掲載された「中央公論」の編集長雨宮庸蔵に宛てた書簡のなかで多喜二が語ったように、[11] それまでの「小ブルジョア・農民文学」や進歩的作家の作品では「依然『封建的』な農村、或いは僅かに『過渡的な』農村」しか描けておらず、「小作人の惨めな生活（日常の）ばかり」がとらえられてきた。しかし「資本主義が支配的な状態のもとの農村」においては「小作人と貧農」が「如何に惨めな生活をしているか」ではなく、「如何にして惨めか、又どういう位置に、どう関連されているか」という「彼等自身知らずにいる」ことを明らかにするのが「第一の重大事」であるという。これは見たこと聞いたことをありのままに描く素朴なリアリズムからの脱皮を示し、具体的な小作争議の現場を作品の素材としながらも、抽象化された社会科学の理論（たとえばレーニン「資本主義展開期における農村問題」）を援用して、現実の背後にある権力を撃とうとするのである。島村輝氏によって「このテクストは、読者である農民たちにとって、自分たちとそうした社会変革の運動との間を媒介し、日常的な現実感覚を更新するような、挑発を含んだものであった」と指摘されるように、[12] この新しい手法を用いて多喜二は「地主のブルジョア化の過程」において「不在地主が資本主義下の典型的形態」をとっていることを暴露し、それに対抗するためには「『農民』と『労働者』の協同」が必要であることを呼びかけた。

有島はニューハンプシャーの開拓農場でポーランド移民に交じって労働した体験にもとづいて、人種差別の旧弊が解消される〈開拓地〉に希望を抱き、それを「首途」（「白樺」一九一六年三月）のなかに描いた。[13] そして「カインの末裔」では、仁右衛門〈個人〉の狂暴な〈本

能〉をデフォルメさせ、教化馴致されるのを拒否することを通じて社会の変革がおこなわれる可能性を見出そうとした。しかし小作人たちと連帯せず、函館にいる場主のもとに彼ひとりで交渉に出かけるが一喝されて農場から追放され、再び放浪の旅に出ざるを得なかった。イーグルトンによれば、大邸宅に住む場主には「放蕩」が許されているように、「確固たる共同体的同一性の枠組み」によって維持されている場合のみ「無政府主義的な個人主義」が可能になる。[14] 有島は仁右衛門が「母胎なる自然と噛み合はなければならない運命を荷ふ」と同時に「人間社会とも噛み合はなければならない」とするが、本来それは有島のような場主によって解決されるべきものである。有島は仁右衛門を「自己を描出したに外ならない」人物とし、「人からは度外視され、自然からは継子扱ひされる苦しい生活の姿」を描き出したとする。[15] 自己の鏡像として造形されていたことを考えれば、仁右衛門が農場から追放されるのは、有島に自己を否定したいという衝動があったためで、カインの印を帯びているのは場主の立場にあった有島自身であったことが分かる。

他方、北海道庁立小樽商業学校在学時代から「生まれ出づる子ら」という個人誌を創刊して小説の創作をはじめた多喜二は、有島の文学から強い影響を受けて作家主体を形成させた。とりわけ「カインの末裔」を読んで「原始人的な、末梢神経のない、人間を描きたい」という意欲を湧かせ、「防雪林」を約一三〇枚まで書き進め、残り一五、六枚というところまで到達しながら、[16] 結局それを書き上げることを断念した。そこであらためて〈集団としての農民の闘争〉を「不在地主」に描くことを選び、小作人たちが農民組合の活動を通じて不在地主による収奪の構造を知ることで階級意識の自覚を深め、都市労働者と連帯する争議のプロセスを描き出した。[17] このような「防雪林」から「不在地主」への改作は、多喜二が有島とは異なる立場にいたことを明らかにし、「自分が迫害してきた者たちから復讐されるのではないかという恐れ」を抱く支配者の側に立つのではなく「支配者がカインの印を負っているのは自分の行為に原因がある」ことを突き詰めようとしたのである。

多喜二はさらに「蟹工船」では銃の先に着剣した駆逐艦の水兵によって「赤化」乗組員が弾圧され、「不在地主」では「あんまり内地で、所々に農民騒動が起るんで、今度の演習だってその下稽古かも知れないど……」と陸軍が小作争議の弾圧に備えて軍事演習をおこなっていることを明かす場面を創作した。不在地主によって象徴されるような〈半封建的地主制〉にもとづいた帝国日本の資本主義は、「治安維持」を大義名分にして軍および治安警察が国家暴力を恣意的に行使した。そしてそれらを撃とうとした多喜二は、白色テロルのために生命を奪われることになったのである。

注　小林多喜二の本文は『定本小林多喜二全集』（新日本出版社）に依拠している。

（1）テリー・イーグルトン『表象のアイルランド』（一九九七年六月、紀伊国屋書店、一二五頁）、原著は Terry Eagleton,, HEATHCLIFF AND THE GREAT HUNGER: Studies in Irish Culture, ,London and New York:Verso,1995)

（2）『富良野市史』第一巻（一九六八年一二月、富良野市役所、一七一頁）

(3)『富良野市史』第二巻（一九六九年二月、富良野市役所、五四九頁）
(4) 前掲（2）と同書、一〇七頁
(5) 前掲（2）と同書、四五二頁
(6)『農魂』（磯野農場争議六十周年磯野農場・町有地解放四十五周年記念協賛会、一九八五年九月、一五頁）
(7) 堅田精司「北海道における土木労働者の労働運動―一九二〇年代を中心に―」（永井秀夫編『近代日本と北海道―「開拓」をめぐる虚像と実像』、河出書房新社、一九九八年四月、三三〇頁）
(8) 同右書、三三二頁
(9) 津田孝『小林多喜二の世界』（一九八五年二月、新日本出版社、一六七頁）
(10)『開けゆく大地』（「北海道開拓記念館　常設展示解説書」第五巻、二〇〇〇年三月、二七頁）
(11) 小林多喜二書簡（一九二九年九月、雨宮庸蔵宛、封筒欠）
(12) 島村輝「〈モダン農村〉の夢―小林多喜二「不在地主」論―」（「日本近代文学」第四三号、一九九〇年一〇月、四七頁）
(13) 拙稿「有島武郎における〈開拓地／植民地〉文学―「迷路」から「カインの末裔」へ」（「有島武郎研究」第一一号、二〇〇八年三月、一八～三一頁）
(14) 前掲（1）と同書、一二六頁
(15) 有島武郎「自己を描出したに外ならない『カインの末裔』」（「新潮」、一九一九年一月）
(16) 小林多喜二日記（一九二七年一一月二三日）
(17) 小林多喜二日記（一九二八年一月一日）
(18) 前掲（1）と同書、三三一頁

（おにし　やすみつ　三重大学人文学部教授）